
夏（『夕日』の番外編）

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏（『夕日』の番外編）

【Nコード】

N6960J

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

『夕日』の番外編です。主人公は『夕日』の主人公、ユウタの友人の西原君。8月、夏まっただなか、彼は彼女のユウコと海水浴に行きます。

これが二人の結婚するきっかけに……。

『夕日』を読んでいない人にも分かる内容にするので、読んだことがない人も大丈夫です。そして”いいな”と思ったらぜひ『夕日』も読みに来てください。

話数は10話前後の予定です。それではみなさん、どうぞよろしく

お願いします。

1、金曜日

1、金曜日

時間は午後8時、仕事が終わる僕はこれから家に帰るところだ。

今日は残業で遅くなり、同じ部署の友人も先に帰ってしまった。そのため一人でエレベーターを降り、1階の自動扉を通り抜けた。駅へと続く歩道を歩き始めると、前に友人のユウタがいるのを見つけて声をかけた。彼は営業で部署こそ違うものの、商品の詳しい説明をするために営業の外回りについていくことが多く、かなり親しい仲だ。

「おーい、ユウター」

「ん」

彼が声に反応して後ろを振り向いた。

「おう。一緒に駅まで行こうぜ」

「うん」

二人は並んで話しながら駅まで歩いていく。

「珍しいなあー、こんな時間に帰り道で会うなんて。もしかしておまえも残業か？」

「うん。仕事が溜まってさ、それで遅くなっちゃったよ」

「やっぱりそうか」

「あつ！　そういえば話変わるけど、おまえ今週の休日はどうするんだ？」

「どうするって……」

「言ってたじゃん、昨日の昼に。彼女と一緒にデートに行くって」

「あー、その話か」

「約束はしたの？」

「いや、それがまだなんだなあー」

「そうなのか」

「行く場所が全然決まらなくてさ、彼女に考えておいてって言われて

るんだけど……」

「それなら海とかどうだ？ 8月だし」

「海か。海ってやっぱ海水浴か。」

「そりゃそうだろ。真夏の定番だし」

「うーん、彼女、オツケーしてくれるかなあー」

「大丈夫だと思うよ」

「まあ、メールしてみれば分かるか。よしっ！ 帰ったらさっそくだな」

「うん。あつ！ そうだ！ ついでだしオススメの海水浴場とか教えようか？」

「えっ、あるのか？」

「うん。森崎市って分かる？」

「森崎市って……、えっと、それってもしかして最近テレビ番組の特集で紹介されてた東森崎海水浴場のことか？」

「そうそう、そこ。実はつい2週間ほど前だったんだけど、同じ営業の人に誘われて行ったんだ。砂浜がきれいで、人もそんなに多くなくて、海の家のご飯もおいしくて、かなりいいところだったよ」

「そうか。じゃあ、そこにするか」

「あとは彼女がオツケーしてくれるかどうかだね」

「だな」

「セクシーな水着姿を見られるかもよ」

「水着姿か。俺の彼女、結構スタイルいいし期待できそうだな」

「あー、羨ましい」

「そんなこと言うなよ。お前にもいるじゃねえか、彼女が」

「彼女！？ 違うよ。ミカにはまだ告白してないし」

「そうだったけ。とにかくいいぜ、彼女は」

「そうか。まあ、そのうちだな」

ここで二人は駅に中宮駅に到着した。彼は僕とは逆方向のため、ここでお別れた。互いに切符を買って改札口を通ると別々のホームへ向かった。

8時40分、家に帰ってきた僕はさっそく彼女にメールを送った。

（明日のデート、海水浴とかどう？）

（海か、いいねー。どこの海水浴場？）

（東森崎海水浴場だよ）

（あっ！ テレビで特集されてとこだね。わたし、一度行きたかったんだ）

（じゃあ、決まりだね。何時に出発する？）

（8時でどう？）

（分かった。じゃあ、8時に迎えに行くね）

（うん。明日が楽しみ〜）

こうして二人は明日のデートで海水浴に行くことになった。

2、出発

2、出発

土曜日の朝、僕は7時に目を覚ました。身支度を済ませて荷物を持ち家を出て、車で彼女を迎えに行く。

7時55分には彼女のアパートの下に着いた。5分ほど車を止めて待っていると彼女が降りてくる。

僕は車から降りて彼女とあいさつを交わす。

「おはよう。お待たせー」

「おはよう」

「待った？」

「うんうん、5分前に来たところだよ」

「そう。じゃあ、ちよつと待たせちゃったね」

「まあ、とりあえず行こうか？」

「うん」

「乗ってよ」

そう言つて僕は助手席のドアを開ける。

「うん」

彼女が助手席に座ると、僕は運転席に乗り込んだ。

「荷物は後ろの席に置く？」

「うん」

僕は彼女が膝に抱えている荷物を持って、後ろの席に手を伸ばして置いた。

「じゃあ、出発ー」

エンジンを掛けて車を走らせる。

「今日は朝、何時に起きたの？」

「えっと、6時半かな。早く起きたからおしゃれしてきちゃった。」

彼女の姿は普段会社で会うときの落着いた雰囲気ではなく、服は薄い黄色で半そでのワンピースで髪を下ろして少し大きめの麦わら

帽子を被っている。

「どうかな？」

「いいんじゃない、とてもよく似合っているよ」

「よかったー。ねえ、特にどこがいいと思う？」

「うーんと、その帽子かな。ピンクのリボンがとてもよく似合っているよ」

「この帽子か。これかわいいからすごく気に入ってるんだ」

「そうなんだ。あつ！　そういえば浮き輪とか持ってきた？」

「うん。それならかばんに一つ入ってるよ。西原君は何か持ってたの？」

「僕はね、浮き輪を一つとあとビーチボールを持ってきたよ」

「ビーチボールか。じゃあ、砂浜でビーチバレーとかもしようね」
「うん」

ここで一度二人の会話が途切れる。

5分ほど経って信号で車が止まると、彼女が話しかけてきた。

「ねえ、どのくらいで海水浴場に着くの？」

「えっと、あと40分ぐらいかな」

「結構あるね」

「そうだな。じゃあ、音楽でも掛けようか」

「うん」

「何がいい？」

「何でもいいよ、西原君が好きな曲で」

「分かった。ちょうど今入っているやつが海にピッタリの曲だし、それにしようか」

僕は車が信号で止まっている間にオーディオプレイヤーの再生ボタンを押す。すると車内に『サウスオールスターズ』の軽快な音楽が流れ始めた。

「あつ！　私、このバンドの曲好きだよ」

「そうか。よしっ！　信号も青になったし海に向かって出発ー！」
「出発ー！」

こうして二人の声と軽快な音楽に乗って車は海に向かって走り始めた。

3、到着

3、到着

二人を乗せた車は8時50分に海水浴場に到着した。

「さあ、着いたよ」

「うん」

二人は荷物を持って車を降り、外に出る。さっそく海の家に向かう。
「いらっしやいませ。2名様ですか」

「はい」

「大人一人500円で1000円になります」

僕は財布から1000円札を1枚取り出して渡す。

「はい」

「ちょうどですね。ではご案内いたします」

二人は海を家の白いテーブルの一つに案内された。向かいかって椅子に座る。

「じゃあ、まず着替えようか？」

「うん」

「えっと、荷物を持って更衣室にと……」

「更衣室？ いいや、私、服の下に水着着てきたからここで脱いじゃうね」

「そうなんだ。あれ？ じゃあ、カバンには浮き輪以外に何が入ってるの？」

「替えの下着かな。さすがに濡れた水着を着て帰るわけにいかないからね」

「なるほど」

「それで私はここで脱いじゃうけど、西原君はどうするの？」

「僕は更衣室で着替えてくるよ。だからここで待ってて？」

「分かった」

そう言っ僕は荷物を手に更衣室に向かう。

5分後、着替え終わった僕は彼女が待っているテーブルに戻る。そこには薄いピンク色のセクシーなビキニを着た彼女が立っていた。

「お待たせー」

「おかえりなさい。どうかな私の水着？」

「とてもよく似合ってるよ」

「よかったー」

ここで水着姿になった二人は椅子に座り、さらに話を続ける。

「ねえ、ここって砂浜がきれいでいいねー」

「そうだな。それに今日は人もそんなに多くないし」

「でもどうしてテレビで特集されるぐらいところなのに人がそんなに多くないのかな？」

「それもそうだな。うーん、でもおそらくここが郊外だからじゃないかな。」

「えっ！ でも街から1時間ぐらいでしょ、こんなにいいところならもっと人がいてもいいんじゃない？」

「それもそうだけど、確か街から20分ぐらいのところにもう一つ大きな海水浴場があったはずだからね。みんなそこに行くんじゃないかな」

「そうなんだ」

「さてと、じゃあそろそろ泳ぎに行こうか？」

「うん」

「あつ！ そういえば浮き輪、膨らましておいてくれたんだね」

「うん。西原君が着替えている間にポンプを借りてきて膨らましておいたんだ」

「そうか。ありがとう」

「どういたしまして」

「さあ、行くぞー！」

「うん」

二人は席を立ち上がって浮き輪を持ち、手をつないで海に向かって

走っていく。

“ザバーン!!”

そして二人は勢いよく海に飛び込んだ。

4、沖へ

4、沖へ

海に飛び込んだ二人はそれぞれ、僕は浮き輪につかまり、彼女は浮き輪の上に座っている。

「いいね、やっぱり海って」

「そうだな」

「今日は水もそんなに冷たくなくてちょうどいいね。」

「うん。天気予報で言っていたけど今日は昼間、35度まで上がってかなり暑くなるらしいよ」

「そうなんだ。じゃあ、今日は絶好の海水浴日和だったんだね」

「うん」

「ねえ、ちょっと沖まで行ってみない？」

「沖？危くない？」

「大丈夫だよ。今はそんなに波も荒くないみたいだし」

見ると風もほとんどなく海は沖の方でも多少さざ波が立っている程度である。

「うーん、確かにそうだね。それじゃあ、せっかくだし行ってみようか？」

「うん」

そして二人は浮き輪に捕まり足をバタつかせてゆっくり沖へと泳いで行く。

10分ほど泳いだところで、僕は少し疲れてきた。二人の間に3、4メートルほど差が開き、前に彼女がいる。僕はその彼女を呼び止める。

「おいっ！速いなあー、ちょっと待ってよ」

すると彼女は後ろを振り向いて答えた。

「どうしたの？もう疲れちゃったの？」

そう言つて彼女が泳ぎを止めてくれたので、僕は追いついて答える。

「うん、ちよつとね」

「情けないなあー」

「そんなこと言ふなよ」

「ごめん、ごめ。」

「でもどうしてそんなに元気なの？　もしかして子供の頃に水泳をやつてたとか」

「うん。私、高校まで水泳部だったから」

「そうだったのか。じゃあ、大会とは出たことあるの？」

「あるよ。でも県大会止まりだからたいしたことはないけど」

「県大会か。十分すごいじゃん」

「そうかな。西原君はどんな部活に入つてたの？」

「僕は中学、高校と陸上部だったな。だから走るのは得意だけど泳ぐのはそんなにうまくないんだよね」

「陸上部。ねえ、それって専門は短距離？」

「まあ、そうだね。一応200メートルで高校3年のときに県大会までは進んだけど」

「じゃあ、私と一緒にだね」

「そうだな」

「そういえば話し変わるけど、私たち結構沖の方まで来たね」

そう言われて僕は後ろを向き海岸との距離を確認する。見ると先ほどまでいた海の家がかなり小さくなっている。

「そうだな。で、どうする？　もう少し沖まで行く？」

「うん。あつ！　でも疲れてるんでしょ？　大丈夫？」

「大丈夫だよ。少し休んだから」

「そう。じゃあ、行こうか」

「うん。出発ー！」

「出発ー！」

こうして二人は再び沖へ向かつて泳ぎ始めた。

5、沖で

5、沖で

再び泳ぎ始めてから20分、二人砂浜から500メートルほど離れたところまで来ていた。目の前にはロープが張られており、その先は遊泳禁止区域になっている。

「ほら見て、海の家があんなに小さく見えるよ」

彼女が後ろを向いて言う。

「うん。なんか一番沖まで来ちゃったね」

「疲れた？」

「うん。かなりきつかったな。でもよく考えたらこれからまた泳いで戻るんだよね」

「そうだけど……」

「僕…、大丈夫かな？」

「どうしたの？そんなに疲れてるの？」

「うん。こんなに泳いだのは久しぶりだからね」

「そうなんだ。私は泳ぐの好きだからまだ元気だけど……、ちょっと心配だなあ」

「うーん、でもまだ少し休んだら大丈夫だよ」

「そう？ それならいいけど」

「いやー、それにしてもすごいな、まだ元気だなんて。さすが元水泳部って感じだね」

「うん」

「そういえばさっき聞いてなかったけど水泳部ではどんな種目をやってたの？」

「中学、高校と両方とも自由形だったかな」

「自由形か、定番だね。距離は何メートル？」

「中学のときが200、400メートルで、高校が400、800メートルだったよ」

「へえー、800メートルか、すごいね」

「でしょー。長くてホントきつかったなあー」

「さっき言ってたけど、県大会に進んだってのは両方とも？」

「うんうん、400メートルだけだよ。800メートルはそこまで得意じゃなかったからあまりいいタイムが出せなかったんだよね」

「そうなんだ。あれ？でも得意じゃないのにどうして800メートルに出たの？」

「本当は200、400メートルに出たかったんだけど、200メートルは他に速い人が3人いて、それで棒が埋まっちゃって出られなくて。だから代わりに空いていた800メートルに出ることになったんだ」

「なるほど。なんかそれは残念だったね」

「うん。でも目標だった県大会出場が400メートルで達成できたからよかったんだけど」

「それじゃあ、満足はしてるんだ」

「うん」

「話変わるけど、そろそろお腹空いてきてない？」

「そうだね。確かにたくさん泳いだからお腹は減ってきたかな」

「じゃあ、早く戻ってすぐ昼ごはんしようか」

「うん」

そして二人は今度は砂浜に向かって泳ぎ始めた。

50分後、僕はへとへとなりながらもやっこの思いで砂浜に戻ってきた。

「はあっ、やっと着いた」

「大丈夫？」

「うん、ちよっときつかったけど。ユウコはまだ元気なの？」

「私もちよっと疲れたかな。だから早く昼ごはんにしよう」

「うん」

こうして二人は海の家で昼ごはんを注文しに行った。

6、注文

6、注文

カウンターの前に来た二人はメニューを見ながら話をする。

「何しようか？」

「えっと、ここいろんなものがあるんだね」

「そうだな。定番の麺類、ジャンクフードから定食まで、ファミレス並みにそろってるね」

「うん。私、こういうところって軽食しかないと思っていたからちよつとびっくり」

「確かに珍しいな」

「でもこんなにたくさんあると迷っちゃうね」

「うん。どうしよう？」

「あつ！ そういえばテレビで特集があつたときに、何かオススメのメニューを言ってたような……」

「そうだったけ？ だとしても覚えてないや」

「そうか、残念」

「でもこの海水浴場は友達の井上君に勧められたんだけど、ご飯はおいしいって言ってたよ」

「そうなんだ。じゃあ、安心して頼めるね」

「うん」

ここで二人は一度話すのをやめ、注文するメニューを考える。

3分後、まず彼女が声を上げる。

「じゃあ、私、アメリカンドックとポテトのしにしょ」

「なんかすごい組合わせだなあ」

「そう？」

「だってファーストフードに来たみたいじゃん」

「そうだけど……、なんか食べたくなっちゃったんだよね。西原君

はどうするの？」

「それじゃあ僕はラーメンと餃子にしよう」と

「ははっ、それだとラーメン屋さんに来たみたいだね」

「お互い様だろ。腹減ったし早く頼もう」

「うん」

そして二人はカウンターの前でメニューを注文する。

「いらっしやいませ、何になさいますか？」

「アメリカンドック1つとポテトのLを1つ、それとラーメンと餃子1つずつ」

「はい、かしこまりました。一緒に飲み物はいかがですか？」

「どうする？」

「持ってきてないし頼もうか」

「そうだな。じゃあ、コーラを1つ。ユウコは？」

「私はメロンソーダしよつと」

「あとメロンソーダを1つ」

「はい、かしこまりました。…。合計で2300円になります」

僕は財布から2300円ちょうどを取り出す。

「2300円ちょうどですね。それではできましたらお呼びするの
で、番号札を持ってお待ちください」

「はい」

そして二人は自分たちのテーブルへと戻る。呼ばれるまでの間、二人は話ながら待つ。

「海っていいよね」

彼女がそうつぶやく。

「そうだね。」

「静かに響く波の音、青い海の透き通るような雰囲気、あとそれから沈んでいく夕日で赤く染まるのも好きだな」

「いいね。じゃあ、今日は夕方までいようか？」

「うん。沈んでいく夕日、二人で眺めようね」

「うん。そういえばさユウコは何か海の思い出ってないの？」

「思い出かぁー、あるよ。聞きたい？」

「うん」

すると彼女は自分の高校時代の恋愛について話し始めた。

7、思い出

7、思い出

僕は彼女とつき合い始めて1年近くになるが、彼女の恋愛についてはまだ一度も聞いたことがなかった。

「私、高校時代付き合っていた彼氏がいたんだ」

「彼氏か。どんな人だったの？」

「優しい人だったな。いつも私のことを気づかせてくれて。帰りもいつも一緒だったし、すごく楽しかったよ」

「とても仲がよかったんだね」

「うん」

「どうしてつき合うようになったの？」

「彼が告白してくれたのがきっかけかな」

「へえー、告白されたんだ」

「そう、私の誕生日の日にね。昼休みに体育館の裏で、「好きです、つき合ってください」って言われて。すごいドキドキして心臓が高鳴ったの、今でもよく覚えてるよ」

「いいね。なんか定番って感じだな。ユウコは前々からその人は好きだったの？」

「うんうん。クラスも違う子で、私、告白されるまで名前だけしか知らなかったんだよね」

「そうなんだ。じゃあ、どうしてつき合おうって思ったの？」

「なんていうか……、雰囲気かな。告白されたときにいいなって思っ

って。それでつき合ってみようって思ったの」

「雰囲気か。大事だよな、そういうのって。でもなんで彼は全く違うクラスのユウコの誕生日なんか知ってたの？」

「クラスの女の子に聞いたんだって。それで私の誕生日の日に告白するって決意したって言ってた」

「なるほど。それでさっき言ってた海の日の思い出ってのは？」

「高校3年生の最後の夏休み、受験勉強が本格的に始まる前に行ったんだ。二人きりで朝から夜の9時まで、めいいっぱい」

「夜の9時か。ずいぶん遅くまでいたんだね。親とかに怒られなかった？」

「うん。まあ、帰ってから思いつきり叱られたけど。それでも楽しかった。海に向こうに沈んでいく夕日を眺めて、そして辺りが暗くなつてからは満点の星空を二人で見上げる。感動したな」

「それはよかったね。あれ？ でも今僕とつき合っているってことは……」

「……うん」

「もしかして……、そのあと別れちゃったの？」

「うん……」

「あつ！ ごめん。なんか悪いこと聞いちゃったね。無理に答えなくていいよ」

「うんうん、大丈夫。ついでだから別れたことについても聞いてくれる？」

「いいの？」

「うん。こういうことは話しておいたほうがいいかなって。西原君には私のことをなるだけ知っていてほしいし」

「そうか。じゃあ、聞かせてもらおうよ」

「別れることになったのはその年の12月だったかな。確か12月10日、一緒に学校から帰っているときに、「他に好きな人ができたんだ。ごめん、別れてくれないか」って。あのときの驚いて熱が冷めていく感じ、今でも身体がちゃんと覚えてる」

「それは……、なんだろう、辛かったね」

「うん。そんなこと言われるなんて全く思ってたから、余計にあのときはショックだった。私は彼のことはすごく好きだったし、これからもずっと一緒だと思ってたから」

「そうか。で彼にはなんて言ったの？」

「すぐに「イヤッ！」って叫ぼうかなって最初は思っただけど…」

…、彼を傷つけないとおもって言わなかった。それで少し考えて言ったんだ、「分かった。それじゃあ、がんばってね。応援してるから」って」

「ユウコはとても優しいだね」

「とにかく彼を傷つけれなかった。別れるのは悲しいけど純粹にそう思ったんだ」

「ふーん、すごくいい話だね。聞けてよかったよ」

「そう。話してよかった」

ここで話は一段落つき、同時に僕らの番号札を呼ぶ声が聞こえてくる。

そして二人は売店に昼ご飯を取りに向かった。

8、昼食

8、昼食

カウンターで注文したメニューを受け取った二人は席に戻ってくる。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

二人はさっそくラーメンとアメリカンドックをさっそく口にした。

「おいしー。どう？ そっちは」

「うん、こっちもおいしいよ」

「一口、ちようだい」

「いいよ。はい」

そう言つて僕は彼女のほうにラーメンを渡す。

「ありがとう。じゃあ、こっちも食べてみて」

「分かった。食べてみるよ」

代わりにアメリカンドックを受けとった僕は一口、それを口にした。

一方彼女も僕のラーメンを一口、口にする。

「どう？」

「うん、おいしいね。そっちは？」

「うん、確かに旨いな。特にこのソースがおいしいよ」

それぞれの注文したメニューを口にした二人は、自分のものを食べながら話を続ける。

「でも珍しいよね、こういうところでご飯がおいしいなんて」

「そうだな」

「そういえば西原君でさっき言つてた市内の海水浴場って行ったことあるの？」

「あるよ。去年だったかな、同僚と一緒に」

「どうだった？ そこのご飯は？」

「あー、そういえばまずかったな。品揃えも中途半端で最悪だった

よ」

「そうだよ。私も去年、女友達と一緒に رفتاندا فقط、人が多くて人氣があるわりにはご飯はおいしくない。だからこういうのって大切だよ」

「うん。海ってせつかく景色がよくいいところなんだから、ここみたいにご飯もおいしくないよね」

「そうだね。でもなんでここって人が少ないんだろう、ホントにもっと人氣出てもいいのに」

「そうだな。やっぱり場所なんだろうな。僕、運転してるから分かるんだけど、海水浴って行きはいいんだけど、帰りは疲れて眠くて大変なんだよね。だからみんな多少悪くても近場のほうが行きやすいじゃないかな」

「なるほど、そうなんだ。じゃあ、帰りは私が運転しようか？」

「いいよ、気を遣わなくても。別にそういう意味で言っただけじゃないから」

「そうなの？　じゃあ、いいけど」

「あれ！？　そういえばユウコって免許、持ってたっけ？」

「あっ！　気づいちゃった。冗談だよ、冗談。もう、騙されて帰りはハンドルを握らせてもらえと思ったのに」

「なんだ、冗談か。でも危なかったな。気づかなきゃ帰りは交通事故に遭うか、どこか知らないところに連れて行かれるところだったよ」

「ん、もしかして本気にしてるの？」

「そんなわけないだろ。おもしろいかなって思ってちょっと話に乗ったただだよ」

「だよー。はははははっ」

「ははっ」

「あっ！　でも帰りは二人でホ……」

「えっ！？」

「あっ！　今のは聴かなかったことにしといて」

「そう？」

「うん」

「分かった」

こうして二人は楽しい話に花を咲かせながら、ご飯を食べていった。

9、ビーチボール

9、ビーチボール

昼ご飯を食べ終わった二人は食器を返しに行き、自分のテーブルに戻ってくる。

「何しようか？」

「また海で泳ぐ？」

「うーん、それもいいけど、ビーチボールあるし、ビーチバレーでもしない？」

「いいね、そうしようか」

「うん」

すると二人は席を立ち、僕がボールを持って5メートルほど離れて向かい合う。

「いくよー！」

そう僕は彼女に声をかける。

「オッケー！」

彼女から元気な声が返ってくる。

「それっ！」

“ポンッ”

そう言っ僕は勢いよく高いサーブを上げる。

「えいっ！」

“ポンッ”

「いけっ！」

“ポンッ”

こうして二人の間でしばらくラリーが続く。

10分近くの長いラリーが続いて、そこで僕は返ってきたボールを、思いっきり高い高さまで打ち上げた。ボールは風に流されて彼女の立っているところから2、3メートル右側に落ちた。

「もうっ、西原君、上げすぎだよ」

「ははっ、ごめん、ごめん」

僕は半分笑いながら頭を下げる。

「それじゃあお返しに、えーいつ!」

“ポンッ”

今度は彼女がさらに高いサーブを上げる。するとボールは案の定、風に流され僕の立っている位置から大きく左側にそれて地面に着いた。

「やるなー」

「ははっ、ほら、次、つぎー」

「よしっ! それっ!」

“ポンッ”

そしてボールは再び空高く舞い上がった。

こんなやりとりを続けながら二人は3時過ぎまで、夢中になってビーチバレーを続けていた。

「ねえ、ちよっと休もう。」

僕は彼女にそう声をかける。

「そうだね、ちよっと疲れちゃったし」

二人はビーチバレーをやめて、再び席に戻る。

「はあっ、なんか喉が渴いたなあー」

「ジュースでも買いに行こうか」

「そうだね」

席を立つて二人は海の家にジュースを買いに行く。

5分後、それぞれ先ほどと同じコーラとメロンソーダを買ってきた二人は、席に戻り話し始める。

「ビーチバレー、楽しかったね」

「うん。なかなか面白かったよ」

「でも西原君がすごく高くボール上げるから、私少しやりにくかったな」

「そう? 悪かったね。ごめん、ごめん」

「何か理由があるの？ ボールを高く上げるの？」

「理由ね。ないわけじゃないけど……、しいていうならクセかな」

「クセ？」

「うん。高校の授業でバレーボールをやったんだけど、そのときに高いサーブばかり打ってたんだよね」

「上手かったの？ バレーボール。」

「いや、下手だったな。何しろ同じチームのバレー部の子が、反対側にいるにもかかわらず僕のところに来たボールを取りにくるくらいだったからね」

「それは……、なんか分かる気もするけど、ちょっと失礼な話だね」

「うん。でも代わりになぜかサーブだけは上手くて、ほとんどミスしなかったな」

「そうなんだ」

「それでちよつと天井サーブみたいな感じでかなり高いサーブを打ってたんだよね」

「天井サーブか。ちよつとカッコイイね。それで上手くいったの？」

「そうでもなかったな。結局室内だしただ高く上がるだけで、特に意味はない感じだったね」

「そっかー、確かに室内じゃ風があるわけでもないし、あんまり意味、なさそうだもんね」

「うん。た少し楽しかったかな。まあ、単なる自己満足だけど」

「いいんじゃない、授業なんだし。楽しめたらそれでいいよね」

「そうだな」

二人はそんな楽しい話をしながらジュースを飲み干していった。

10、沈み行く夕日の中で

10、沈み行く夕日の中で

時計の針はすでに6時半を回っている。ジュースを飲んで一休みをした後、二人は6時過ぎまで波打ち際で遊んでいた。日が傾き始め辺りの空が赤く染まり始めた頃、二人は自分たちの席に戻ってきた。向かい合って座ると彼女が話しかけてくる。

「きれいー」

「そうだな」

「海に沈んで行く夕日って、なんかいつも見ているのと違うね」

「ああ。何て言うんだろう……、すごく幻想的な雰囲気だよな」

「うん。空が赤く染まっていくと同時に、海も真っ赤に染まってい
く、ホント、きれいだよな」

「普段は都会のと真ん中でビルの谷間に沈んで行く夕日ばかり見て
いる。それを思うと海に沈んで行く夕日はすごく感動的だな」

「ねえ、立ってみて」

「えっ！」

彼女はそう言って席を立ち上がる。

「ちよつと波打ち際に並んで立ってみようよ、夕日を背に」

「いいね。それじゃあ、行くか」

「うん」

すると二人は席を立ち上がり、波打ち際まで並んでゆっくりと歩いていく。二人の目の前には沈み行く夕日が映っている。それはさっきよりもいっそう大きく、そして空はより深い赤に染まっているように感じられた。彼女がそつと呟く。

「なんか違うね、さつきと」

「うん」

「なんだろ大きくなったって言うのかな。空もより深い赤に染まっ
て……、すごくきれいだよな」

「うん、きれいだ」

二人は周りの景色に染まり、飲み込まれていった。そんな雰囲気
二人の心をより密接なところへと導いていく。

「ユウコ」

僕は彼女と向き合っ
てそう呼びかける。

「なに？」

「好きだ」

「私も好きだよ」

そして二人はそっ
と互いを抱き寄せた。唇を近づけお互いを強く求
め合った。

気がつくと二人は3分以上もの長いキスを味わっていた。

その後しばらく無言で向き合っていた二人だが、彼女が少し笑顔を
浮かべて口を開いた。

「ありがとう」

「どうだった？」

「すごく温かった。それに想いがとても伝わってきた気がした」

「そうか。僕もそう思ったよ」

「そっ
ういえばどうする？　これから」

「もう少し暗くなるまでい
ようか」

「うん」

「ユウコ、星空一緒に眺めたい
って言っ
てたもんな」

「うん。一緒に見ようね」

「ああ」

こうして二人は沈み行く夕日の中、赤い空が少しずつ深まり暗くな
っていくのをずっと眺めていた。

11、夜の海岸

11、夜の海岸

時計の針はすでに9時を回っている。日はだいぶ前に沈み、あたりはすっかり暗くなっていた。

海の家はすでに営業時間を終え、自分たちのテーブルを離れた二人はさざ波の音だけが聞こえる中、海岸で座っていた。空は晴れていて満天の星が見えている。隣に座っている彼女が話しかけてきた。

「きれいだね、星」

「そうだな。周りに灯りがないから星がたくさん見えてきれいだよな」

「うん。いてよかったね、暗くなるまで」

「ああ」

「ねえ、西原君、1つ聞きたいことがあるんだけどいい？」

「聞きたいこと？ 何？」

「西原君てさ、私と一緒にいるとき、もしかして気遣ってない？」

「えっ!？」

「ねえ、どうなの？」

「……」

「ん」

回答に困っている僕を彼女は少し心配そうな顔で見つめている。

「そうか、気づいていたのか。確かにちよつとだけ気遣っているかな」

「やっぱりー、そんなことしなくていいのに」

「そうなの？」

「うん。だって私、西原君にはありのままでいてほしいもん」

「そうか、でもなんだる僕、そのままだと調子に乗った感じのキャラになっちゃうからな。そうなると僕のこと、嫌いになっちゃうかもしれないよ」

「そんなことないよ。だって私、本当は西原君のそんなところが好きになったんだもん」

「えっ、そうだったのか？」

「うん。分らなかった？」

「それは知らなかったよ。それじゃあ、これからは気にせずに過ごしていくことにするよ」

「ホント？」

「うん。そのほうが僕も楽だからね」

「やったー！」

彼女はよつぽどうれしいのか声を上げて喜ぶ。

「あっ、流れ星」

「えっ！？」

僕は彼女の声を聞いて慌てて空を見上げた。

「あー、もう消えちゃった」

「そうか、残念だな。何かお願いできた？」

「うんうん、あっという間に消えちゃったから」

「それなら僕にお願いしてみてよ」

「えっ！？」

彼女は僕の思わぬことに言葉に驚き、少し動揺している。

「ん、どうしたの？」

そう言っ僕は彼女の顔を覗き込んだ。

しばらくして彼女はそっと呟いた。

「ずっと一緒にいたい……」

「ずっと一緒にか……、それじゃあ、今日の夜はどうしようか？」

「一緒に泊ま……」

彼女は恥ずかしくなっているのか、思い切って口にできていないようだ。それを察して僕はこう言った。

「これからホテルでも行っ二人で泊まる？」

「あっ、……、うん」

彼女はそう言っ静かに頷いた。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

「うん」

そして二人は立ち上がると、駐車場に止めてある車に向かってゆっくりと歩き始めた。

12、夜道と二人の思い（最終回）（前書き）

いよいよ最終回です。ここまで読んでくれたみなさん、本当にありがとうございました。

12、夜道と二人の思い（最終回）

12、夜道と二人の思い（最終回）

二人を乗せた車は暗い夜の中、国道を通り抜けていく。この道は郊外と街の中心部をつなぐ道でいつもは混雑しているが、今は休日の夜、そのせいか全くと言っていいほど車はなく、走り抜けているのは二人を乗せた車だけだった。

時計の針はもう10時に近づきつつある。明かりの少ない夜の道は暗く、僕はその暗い中に吸い込まれていくような感触を感じながら、車を走らせていた。

海水浴場を出発してから40分、車は街に近づいてきたが、ここまでなぜか二人の間に会話は無い。僕は感じていた、これからおそらくホテルに行き、及ぶであろう行為を考え、彼女が少しずつ緊張を高めているのを。

そしてホテルまであと5分ほどというところで彼女が話しかけてきた。

「ねえ」

「ん」

「あと何分ぐらいで着くの？」

「5分くらいかな、もうすぐだよ」

「そう」

……

これからの興奮をよそになぜか二人の会話はそっけない感じで始まった。

「ねえ、西原君」

「何？」

「私たち、するんだよね」

「ん、何を？」

僕はその問いかけにわざと分かっているようなフリをして返す。

「もう、分かってるんでしょ」

「……、あー、分かってるよ」

「気持ち、確認してもいい？」

「確認？」

「うん。好きなんだよね、私のこと」

「好きだよ、結婚したいくらい」

「えっ!？」

彼女は僕の言葉が予想していないものだったせいか、少し動揺したような表情を浮かべている。
しばらくして彼女は呟いた。

「冗談でしょ」

「何言ってるんだよ、本気に決まってるだろ」

「ホ、ホント!？」

「うん」

「じゃあ、私も好き」

「そうか」

ここで二人の会話は途切れた。

すでに街の中に入っていた車は、ビルや店、住宅の明かりがともる中を走っていた。

会話が途切れてから2分後、ついに車は駐車場に停車した。しかし止まってもすぐに二人は車を降りようとはしない。おそらく感じているのだろう、緊張感がさっきよりの高まってきつつあるのを。

しばらくして僕が話しかける。

「降りようか」

「う、うん」

二人は車を降る。

「さあ、行こうか」

そう言っ僕は彼女に手を差し出す。

「うん」

その手を彼女はしっかりと握り締めてくれた。

（僕は感じ取った、手から彼女の僕に対する思いを。温かった…）

並んで二人は歩き始める。そこには二人だけの空間があり、二人だけが感じている空気がある。それは二人を温かい方向へと導き、幸福へといざなっていく。愛がある、深まっていく思いがある。その先には生まれるものがあり、それこそが二人をつなげるものとなった。

（END）

12、夜道と二人の思い（最終回）（後書き）

最後まで読んでくれたみなさん、改めてありがとうございました。
この話はここで終わりですが本編の『夕日』はまだまだ続きます。
どうぞ最後までお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6960j/>

夏（『夕日』の番外編）

2010年10月24日20時02分発行